ママと雨宿りした小さな木の小屋
そこの住人の老婆が・・・・・・
ママと入浴した一夜

キキーーーーッッ！！！

急ブレーキをかけたがあいにく間に合わず、雪解けがままならない凍ったアスファルトに冬用タイヤにするのを忘れていた僕らの乗用車は、川沿いの道のコンクリートの崖から河原まで落ちていった。

ガッシャーーーンッ！！！

辺りは大雨が降っている。

街中で買い物してから郊外の自宅まで川沿いの道を通って帰る道中だった。
迂回の道で距離自体はこちらの方があるが、街中の大通りよりも信号が圧倒的に少ないのでいつも街中から帰る際はこちらを通ることが多い。

車は破損したが高さがそれほどなかったことで修理に出せば直るレベル。
ただ、レッカー車などを呼ばないといけない。
周囲には誰もおらず車も通りかからない。

傘を持っていなかった俺たちは、そのまま車に乗っているわけにもいかないため雨宿りをする場所を探した。
とりあえずどこかで雨を凌ぎ、電話で助けを呼ぼう・・・・。

力の無いどこか弱々しい空から大量の大雨が降り注ぐ。

少し寒さでみぞれが混じっている。

先日、俺の街では数年に一度の大雪だった。

温度がここ数日は少し上がり、みぞれに変わったのだが。

老婆のいる小屋であった。それ以外に家という家がなかった。

彼女は古びた薪の焜炉（こんろ）で暖を取り、食料は近くの老人たちに主に利用される古い業務スーパーで買う。そんな

毎日を送っていた。

小屋の横にある畑で野菜を耕し自給自足の割合も高い。

米は孫の営業する農家から送ってもらう。

幸せを感じながらの老後の日々であった。

丁度街中とベッドタウンの中間地点。

田畑や空き地が広がる人気の少ない広域地帯の一角。

この辺りは集落化しており老人たちも多いのである。

（体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました）